

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏 名 藤澤 るり

本論文は『三四郎』『心』をはじめとする夏目漱石の主要な長編小説を対象に、作中の言葉の用法を通して他者認識の問題を導き出し、小説自体の精緻な読解によってあらたな漱石像を導き出すことを試みたものである。

構成は序章、第一部、第二部からなる。序章では、人間の不可思議な暗部を追求していた初期作品から、『三四郎』以後、漱石が尋常で凡庸な日常世界を描いていく方向に推移していった過程に着目している。第一部ではこれを受け、『三四郎』であらたに試みられた手法として、主人公三四郎が「田舎者」であり単純であることをことさらに強調する操作を指摘し、それによって登場人物内部の意識や内面にあえて立ち入らない手法が確立されていった様相が明らかにされている。その上で、三四郎と美禰子との会話に注目し、言葉を教え合い、同一語を反復し合う関係を理想に、次第にそれが崩れていくプロセスを指摘し、結果的に金銭関係に代表される現実の論理に両者が絡め取られていく様相が見据えられている。母が幼児に言葉を教える関係をモデルに結末の「森の女」の持つ意味を読み解いていく発想はきわめてユニークなもので、従来の『三四郎』解釈の見直しを迫るものとして注目される。なお第一部ではさらに、『彼岸過迄』『行人』に至る過程で、あらためて「他者」理解の困難がテーマとして浮上し、『心』以後、これが不可解な他者といかに向き合うか、という問題に発展していくプロセスが整理されている。

第二部では、『心』『道草』『明暗』を中心に、如上の課題がさらに深化していく様相がたどられている。すなわち、不可知な他者への問を示す「何故」と、ある事態に至る過程を問う「何うして」という、二つの語の使い分けに注目し、『心』において、「何故」を他者に対して発することのできなかった「先生」が、学生の「私」との対話を通し、次第に理解不可能な他者に「何故」を用いることができるようになるプロセスが明らかにされている。「先生」の遺書もまたこうした変化の反映としてあり、「何故」と「何うして」の相違に気づくことによって、「先生」は人間の本源的な孤独に向き合い、死を選んだのであるという。言葉の使い分けを精緻に検証していく本論の分析手法はまことに手堅いものであり、『心』の「先生」の変化に重要な問題提起を行うことに成功している。

こうした言葉の使い分けは最晩年の二作の分析にも援用され、『道草』においては夫婦それぞれが「何故」「何うして」の使い分けを学んでいく中で、互いを「他者」として認知することを学んでいくプロセスとして、また『明暗』では、最後の温泉場の場面で津田が自分自身の暗部に「何故」を使い始めるようになる変化として、それぞれ精緻な分析が試みられている。

総じて分析の比重にややバランスを欠く側面も見られるが、漱石が最晩年にいたって、初期に見切ったはずのテーマに再び回帰していく必然を明らかにしていくその手法は、従来の研究に新たな地平を切り開くものとして高い評価に値する。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。